

頭を振りながら、

「さて、此の大きな樫の木に、あんな小さな實
が結つて却つて、あの、細い蔓には、あんな大き

を打たれた、若し、此樫の實の大きが西瓜の様で
あつたら今に此鼻は潰されてしまつたらう、し
て見ると、やつぱり私しの思つたよりは都合よく

な西瓜が結るとは、何ん
と不都合な話では無いか

出来て居るのだから。

若し私が世界を造つたな
らば、樫の木に西瓜を結

笑ひ草

三河 近藤とさ子

らせて、あの蔓には樫の
實を結らせる様にしたも

わたるものは食ない
妾しの隣の鎮夫さんとい

のを、不都合なとだ」と
獨り言を云ふて居りまし

ふ今年六才になる男のお
子さんが、何時も妾しの

た。すると、樫實が一粒
落ちてきて、この人の傲慢な鼻先を打ちましたの

所へ遊びに來まして、お

で其男は吃驚して

話をして頂戴、御菓子を下さいといひます。或時
妾しが、鎮ちゃんいものを上げるから、食べま

「嗚呼、私しの傲慢が過ぎたもんだから、忽ち鼻

すかと申しますと、何でも食べると申しますから